



Title	キャプテン・クックとダーウィン：2つの異文化像
Author(s)	正木, 恒夫
Citation	大阪外大英米研究. 1988, 16, p. 69-87
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99123
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

キャプテン・クックとダーウィン

——2つの異文化像

正 木 恒 夫

1. 2つの航海

18世紀の後半から19世紀の前半にかけて行われた2つの名高い航海。1つはジェイムズ・クックの、1771年から80年にいたる3度の航海。クックは1または2隻のイギリス軍艦をひきい、南北太平洋の広い海域を航行して、この地域に残された地図上の空白を次々に埋めていくが、第3次航海の途次、ハワイ島で非業の死をとげる。もう1つはチャールズ・ダーウィンの、1831年から足かけ6年におよぶビーグル号の航海。ダーウィンは南米沿岸のほぼ全域にわたって地質学的・博物誌的調査を行った後、南太平洋を横断して帰国するが、その間に得た豊富な知見は、やがて『種の起源』となって結実するだろう。クックの航海が、「地理上の発見」時代の掉尾を飾る輝かしい偉業だったとすれば、ダーウィンのそれは、ヨーロッパ思想史の新しいページを開く、これまた記念碑的な事業として、共に人々の記憶にとどめられている。いや、それだけではない。近年相次いで刊行された一般読者向けの書物¹⁾をみると、クックとダーウィンの航海が、地理学と生物学への寄与というほかに、もう1つの魅力——つまり「探検」の魅力をそなえていることが分かる。2人が書き遺した詳細をきわめる航海誌²⁾は、「探検記」としても読むことができる。そして「探検」の魅力は、危機を次々にくぐりぬけていくスリルもさることながら、むしろそれ以上に、未知の世界との出会いにある。未知の世界とは珍しい自然と、そこに住む珍しい人間——要するに異文化のことだから、我々は探検記を読みながら、実は異文化との遭遇を楽しんでいることになる。だからこそ16世紀以来ヨーロッパで出版された無数の航海誌は、実録・虚構を問わず、異文化の描写に格

別の工夫と努力を傾ける必要があった。『ガリヴァー旅行記』(1726)は、単にその極端な場合の1つにすぎない。

私が今これら2つの航海——というより航海誌について考えてみようとするのも、実はその意味においてなのである。私は数年前まずダーウィンの『ビーグル号の航海』を読み、次にクックの航海誌をジョン・バロウの縮約版で読んだ。およそ半世紀の隔たりをもつ2つの航海記録を、私は偶然この順序で読んで、そこに多くの接点があり、地理的にも文化的にもあることを知った。と同時に、その接点にみられる両者の認識の違いに驚いたのである。それは言ってみれば、異文化を解読するために両者が用いているパラダイムの決定的な差異であって、とりわけ私を驚かせたのは、クックが異文化を観察し記録する際の偏見のなさ、感情を排する科学的厳密さであった。そこから逆にダーウィンの描いた異文化像を見ると、この大科学者を深くとらえていた偏見の束がくっきりと浮かびあがることになった。こうした差異が、ヨーロッパの思想界におけるパラダイムの組み替えによるものか、それとも個人的な資質や出自の違いによるものか、はなはだ興味のある所だが、まずはとりあえず、そのような接点の中から典型的と思われるもの3つを選び、両者の認識の差を示してみよう。

2. フェゴ島

さいはての島、ティエラ・デル・フェゴ。南緯53度から55度、マゼラン海峡をへだてて南米大陸の最南端につらなるこの島が、人類の居住を許す極南の地であるばかりではない。そこに住む人々もまた、人間の存在形態の限界を示すさいはての民——クックの言葉を借りれば、「人間社会の外側にはじきだされた人々」(クック、18)だったのである。島の地域によって長身と短身の差があり、身をわずかににおおう毛皮にグアナコとアザラシの違いはあっても、彼らは一様に、夏にも吹雪の見舞う厳しい自然条件の中で、もっとも単純な採集経済を営んでいた。クックは、「彼らの唯一の食料は貝である」(クック、18)と言い、ダーウィンも、貝拾いと海鳥の卵集めと魚釣りが、主な生活の手段だと言う(ダーウィン、203)から、2つの航海誌をへだてる半世紀の歳月が、島

民の生活様式に何の変化ももたらしえていないことが分かる。クックは第1次および第2次航海の2度、ダーウィンは1度、いずれも南半球の夏にこの島を訪れ数日をすごしている。クックの第1次航海の折、内陸部探査を試みた博物学者のバンクス一行が、吹雪に会って遭難、2名の凍死者を出したことがあった（クック、15-7）。ところがその同じ気候の中で、フェゴ島の人々は、「アザラシの毛皮のはかに身をおおうものとしてなく、女性もその毛皮で要所をかくしているほかは、男性と変わりがなかった。母親の胸にとりついて2人の子供は文字通り素裸で、彼らはこうして幼い時から寒さと苦痛に耐えるように鍛えられているのだった」（クック、205）。ダーウィンもまた、次のような情景を書きとめている——「ほど遠からぬ入り江に停泊していると、ある日1人の女が乳飲み子に乳をやりながら本艦の近くまでやってきて、物珍しげにいつまでもこちらを見ていた。その間中ずっとみぞれが降り注ぎ、女のむきだしの胸や裸の赤ん坊の肌に落ちては溶けていたのである」（ダーウィン、203）。

このようにクックとダーウィンは、明らかに同じものを——つまり、「もっとも厳しい風土の中で、生活をいくらかでも快適にする手段を生みだす知恵もないままに、暮らしている人々」（クック、206）を見ていたのである。だがその同じ人々について、クックが人間的な同情とある種の感嘆をすら表しているのに対して、ダーウィンは軽蔑と嫌悪の情をかくさない。もっともクックにしても、不快の念を全く持たなかったわけではなかった。クックたちを悩ませたのは、フェゴ島民の不潔と、鯨油にも似た悪臭だったが、それを誌すクックの筆致には、嫌悪というよりむしろ、一種のユーモアが感じとれる——「住民たちは夕食前に全員ひきあげた。誰も止めようとはしなかった。あの汚い身体と、そのまわりに漂う猛烈な悪臭に見舞われては、食欲など消しとんでしまうこと請け合ひだし、もしそんなことになっていれば、久し振りの大御馳走だっただけに、皆がっくりきたにちがいない」（クック、205）。そして翌日、ふたたび来艦した島民たちがデッキの上で、身をおおうものもなく寒さにふるえているのを見ると、クックは古い帆布とラシャ地を彼らに与えたのである（同上）。このようにクックは、島民の悲惨な生活に同情を惜しまぬ一方、第1次航海の

折には、はじめて目にする島民の自然そのものの姿に、「それでも彼らには特に不満もなさそうだ。これをみても、洗練だのぜいたくだのということが、人間の幸福といかにかわりの薄いものかが分かるではないか」（クック、18）と誌している。要するにクックには、ヨーロッパ的生活様式の対極にある人々を、その差異の故に蔑視する傾向が一切なかったのである。

これと対照的なのがダーウィンであった。フェゴ島民と現地で初めて出会ったダーウィンは、彼らの姿を客観的に記録する前に、いきなり主観的な感想を述べはじめる——「野蛮人と文明人との違いがこれほど大きいとは、とても信じられないくらいだ。野獣と家畜の違いより大きいとすらいえよう。なぜなら人間の方が、進歩の可能性に富んでいるからだ」（ダーウィン、195）。次いで若干の描写（背丈・衣服・肌の色・羽飾り・顔に施された彩色）を試みた後、「彼らは要するに、例えば『魔弾の射手』の舞台に出てくる悪魔そっくりだった」（同上）という感想を、再びさしはさんでいる。とりわけダーウィンをたじろがせたのは、喉音を多く含んだ彼らの言語であって、かつてクックがそれをせき払いの音にたとえたのにすら真っ向から反対し、「一体我々ヨーロッパ人のうちで誰が、せき払いをするのに、こんなにヒーヒー、ガラガラ、クツクツやるだろうか」（同上）と言う。（ちなみに異国の言語音に対する許容度は、異文化理解の重要な指標の1つだが、ダーウィンの場合どういうわけか、その指標が極端に低かったようだ。後にタヒチ島を訪れ、教会で現地語による説教を聞いた時、くり返しの多い単調な音で、耳に快く響かないと述べている（ダーウィン、399）。その同じ言葉を半世紀前に聞いたクックは、「母音が多くて柔らかく、音楽的でしかも発音しやすい」（クック、41）と誌しているのである。）

むしろダーウィンにしても、フェゴ島民に対する同情を全く欠いていたわけではない。唯1度だけだが「この哀れな連中」（ダーウィン、203）という表現を用い、彼らの想像を絶する厳しい日常と、しばしば訪れる飢饉について語る。だがその場合でも、とかくダーウィンの注意は、「白く彩色した恐ろしげな顔、汚い油じみた肌……不快な声、激しい身振り」だの、「くさった鯨の脂肪の塊に穴をあけ、そこから首をつきだして持ち帰る男たち」（同上）だのといった

不快な面にひきつけられてしまう。「こういう連中を見ていると」とダーウィンは言う、「とても同じ人間同志，同じこの地球に住む仲間とは思えないほどだ。下等動物に生きる喜びはあるか，というのはよく議論の種になる問題だが，この疑問はむしろ，この野蛮人たちについて発せられるべきではなかろうか」（同上）。別の所でダーウィンは，白人の1人が自分の腕をまくってみせた所，その白さに半ば驚き，半ばうっとりとなった島民の姿を描きながら，「それはちょうど，以前私が動物園で，オランウータンがやるのを見たことがある，あれと全く同じことだった」と書いている（ダーウィン，198）。ダーウィンはまるで，進化論の歴史に悪名高いあの‘missing link’——オランウータンと人類をつなぐ「進化の失われた環」を，フエゴ島のインディオの中に見つけたといわぬばかりではないか。

3. 歌と踊り

1835年11月15日，ダーウィンを乗せたビーグル号は，タヒチ島マタヴァイ湾に投錨する。タヒチ島はフエゴ島とは違い，「南海の航海者にとって永遠の古典ともいべき島」（ダーウィン，387）だった。かつてウォリスが，ブーゲンヴィルが，そしてクックがこの地を訪れ，その全貌をヨーロッパに伝えた時，それは新大陸「発見」以来の大事件として，ヨーロッパ思想界に深刻な衝撃を与える。多くの知識人が夢想した地上の楽園と，そこに暮らす自然人の実在が証明された——ように思われたのである。豊かな自然との全き調和の中に営まれる自給自足の生活，勤労と余暇の融合，そして自由な愛の開花。ディドロは自国の航海者の報告に刺激され，「ブーゲンヴィルの航海について」一文を草する。

だがそれから半世紀，ダーウィンが降り立ったタヒチ島は，その様相を一変させていた。島にはすでにイギリスやフランスの領事館が立ち並び，民族宗教の神殿マラエはこわされてキリスト教会に生まれかわっていた。島全体のヨーロッパ化とキリスト教化が急速に進んでいたのである。³⁾

このような変化に対して，ヨーロッパでは賛否両論があった。賛成派がそこ

に文明とキリスト教の勝利を見たのは当然のこととして、反対派の論拠は要するに樂園の喪失——つまりヨーロッパ化とキリスト教化による現地文化の破壊だったのである。捕鯨船の寄港と白人の居住による島の道徳的退廃が問題になる一方で、ピューリタンのロンドン伝道協会の布教方針が厳格にすぎ、タヒチ人の陽気な民族性と官能的な文化を圧殺していることを指摘する論者が少なくなかった。こうしたいきさつを十分承知していたダーウィンは、タヒチ訪問に際して、「島民の道徳状態についてぜひこの目で確かめよう」と固く決意していたのである（ダーウィン、397）。

さてダーウィンが得た心証は、「満足」の1語につきる。彼は初めて見るこの島の住民に対して、手放しの賛辞を惜しまない——「この島の住民は全くすばらしい。表情が穏やかで、野蛮人などという先入観を吹きとばしてしまう。どこことなく知性が漂っていて、文明の進歩を感じさせる」（ダーウィン、388）。伝道の行き過ぎが島民の明るさを奪ったという非難に対しても、「ヨーロッパではこの半分も、群衆の中に陽気で幸せそうな顔をみつけることはむずかしいだろう」と言う（同、397-8）。（ダーウィンはここでは都合よく、登山のためにやとった2人の現地ガイドが、すすめられたブランデーを口にする度に、
'Missionary' とつぶやいたことを忘れている）。⁴⁾ダーウィンはまた、ヨーロッパでは特に2つの伝道政策——笛と踊りの禁止および安息日の厳守（とりわけ前者）に非難が集中していることにもふれている（同、398）。当然のことながら、彼が島で耳にした唯一の音楽は、教会の賛美歌だった（同、399）。

タヒチ島の音楽と踊り——特に踊りが、率直な性的表現を含むいたって大胆なものであったらしいことは、クックの冷静な描写（クック、40）からもある程度想像がつく。その踊りをもし見せられていたら、ダーウィンがどんな反応を示したかも、およそ見当がつこうというものだ。だが単なる想像ではなく、ダーウィンが異人の踊りに対して示した反応を知ることのできる例が、1つある。彼がオーストラリア南西岸で見た、先住民（アボリジニー）による「コロポリー」である。ビーグル号がオーストラリアを後にする数日前、キング・ジョージ湾の宿営地を訪れた相当教のアボリジニーに対し、イギリス人は米や砂

糖とひきかえに「コロボリー」を所望する。男性のみを踊り手とするこの踊りは、例のエミュー・ダンスやカンガルー・ダンスを含む躍動的なものだったが、ダーウィンは伸びる腕・くねる身体を見ながら、「この上もなく粗野で野蛮。我々にとっては全く無意味」と考える（ダーウィン、434）。さらに続けて、「全裸に近い身体・身体が、かがり火に照らし出されて、不気味なリズムでいっせいに動くのを見ると、もっとも下等な蛮人の祭りの、これがうってつけの見本なのだと合点が行った」と述べている。

クックは残念ながら、オーストラリアの「コロボリー」を見ていない。従ってダーウィンとの厳密な比較はむずかしいが、異文化の一部としての踊りに対する両者の反応を比較する材料にはこと欠かない。そのきわだった例は、トンガ諸島における現地人とクックの海兵隊との、奇妙な「競演」だろう（クック、265-6）。ある日島の有力な首長の1人がクックに、海兵隊の行進を見たいと申し入れてきた。クックはそれに応じて海兵隊を全員上陸させ、分列行進の妙技を披露した上で、それを一斉射撃でしめくくると、島民一同感に堪えた様子だったが、今度は逆に、彼らの踊りを見てほしいという。そこで展開されたのが、「動きの精妙かつ正確なこと、我々の分列行進など足元にも及ばない」体の見事な演技だった。105人もの男たちが、手に手に小さな櫓のようなものをふりかざしながら、あるいは3列に、あるいは1列に、あるいは半円になって、「全体がまるで1つの大きな機械のように」一糸乱れぬ動きをみせる。伴奏は2つの太鼓が受け持ったが、それより重要なのは踊り手たちが踊りながら歌う歌で、「そこには快いメロディーも欠けてはいなかった」し、「それに合わせての動きがまた、あまりにもすばらしい」ので、「これならヨーロッパの舞台にのせても拍手喝采疑いなしというのが、我々の一致した感想だった。」島民たちはどうだといわぬばかりの風情なので、「ヨーロッパ文明の優位を彼らに深く印象づけるため」クックは最後の手段に訴える。花火である。夜に入ってから打ち上げられた仕掛け花火を見て、島民たちは度肝をぬかれ、ついに「秤はイギリス側に傾いたかに思われた。」ところが彼らは、直ちに新しい踊りでもって応酬する。しかも今度は前座に18人の楽団による民族音楽の演奏があり、それ

がまた、「どんなに完べきで変化に富む諧調の微妙な美しさに馴れた耳にも、この素朴なハーモニーは快く、力強く訴えかけた」のである。

オーストラリアの「コロボリー」と、トンガ島の歌と踊りと——そこにはもとより、芸能としての質の違いはあるだろう。だがそれにしても上の例はクックの、異文化に対して賛辞を惜しまない開かれた心を示して余りあるものだし、それともう1つ私を感動させるのは、クックの観察と描写の精密さである。例えば上の楽団演奏について——「4、5名の者は、長さ3フィートから5、6フィートまでの太い竹筒を手に行っている。筒の上部は開いているが、下部は節で閉じられている。この閉じられた方で、演奏者はたえまなくゆっくりと地面を打つ。すると竹筒の長さによって高さの違う音が得られるが、それが一様に空な低い響きだった……」航海者クックが持ちえたこの曇りのない観察眼を、科学者ダーウィンは、ガラバゴス諸島のフィンチにはともかく、異文化圏の人間に対して注ぐことはついになかったのである。

4. カニバリズム

カニバリズム、すなわち食人に関する認識は、人類学を中心とする諸科学の成果によって、近年大きく変わりつつある。従来事実として信ぜられてきた非ヨーロッパ諸地域——カリブ海、メキシコ、アフリカ、ポリネシア、ニューギニア——における食人は、そのほとんどが伝聞に基づく神話にすぎないことが明らかになった。そして食人神話創出にかかわる社会心理学的メカニズムも、今日ではすでに常識となっている。すなわちカニバリズムは他者規定のもっともラディカルな形として、異質もしくは敵対的な集団または個人にはりつけるレッテルとして利用されてきたのである。我々はその古典的な例を、カリブ族の名から「カニバル」なる語をヨーロッパ諸語に提供したコロンブスに見ることができるだろう。⁵⁾

このことはもちろん、カニバリズムそのものの実在を否定することと同じではない。私はここで、世に有名なポリネシアの食人を否定しようとは思わない。私にとって興味があるのは、事実の有無ではなく、食人情報に対して人々が示

す態度である。カニバリズムが他者規定の一形態である以上、我々は食人情報に対する親和性——言いかえれば信じやすさを、異文化に対する偏見の強度をはかる物差しとして使うことができるだろう。私はここでその物差しを、クックとダーウィンにあてはめてみようというのだが、あらかじめ断っておかなくてはならないのは、クック死後の記録は、その後を襲ったキング艦長の筆になるということだ。またそれ以前の記述にしても、クックの部下による報告も含まれており、従ってここで問題となるのは、クック個人というより、クックとその部下たちの、いわば集団的な認識である。

さてダーウィンの『ビーグル号の航海』には、カニバリズムに関する記述は2箇所しか出てこない。1つはニュージーランド北島だが、後述するクックの報告以来食人種の島として、ヨーロッパ人の脳裏に焼きつけられたこの土地も、すでに「文明」化の過程にあり、ダーウィンは、「この食人と殺人とその他ありとあらゆる凶悪犯罪にみちみちた島の真中に」こつ然と姿を現したイギリス風の農場を見て、いたく感動している（ダーウィン、409-10）。それはイギリス人宣教師が、キリスト教に改宗した現地人と共に建設したもので、当時島の北部だけでも、すでに200人から300人のイギリス人が住んでおり（同、402）、「文明の進歩の結果、部族戦争も激減している」（同、403）から、当然食人の確たる証拠もない。唯ダーウィンは、在留イギリス人から聞いた話として、たき火跡にこげた人骨が散らばっていたという食人情報を記録している。ダーウィンにはその真偽を疑う風もないが、それは「何年も前のものかもしれない、いずれにせよ住民の道德水準の向上は、今後大いに期待できる所だ」（同、412）と述べて、「文明」化の成果に全幅の信頼を寄せている。その一方でダーウィンは、ニュージーランドの先住民をタヒチ島民と比較しつつ、激しい嫌悪の情をかくそうとしない（同、404）。

ダーウィンが記録するもう1つの食人情報は、例のフェゴ島にかかわるものである。ここでダーウィンは、根拠を明示することなしに、「部族戦争の際、食人が行われる」（同、204）と述べ、さらに伝聞証拠によって、飢饉の折老婆がたき火の煙で窒息死させられ、食べられる風習のあることを誌している。ダー

ウィンがこの証言をひきだした相手は、1人はビーグル号のフィッツロイ艦長が、前回の航海でイギリスに連れ帰っていた島の少年ジェミー・バトンであり、もう1人は当時島に滞在していたアザラン漁船のロウ船長であった。ロウ船長はむしろそれを目撃したわけではなく、島の別の少年からその情報を得ていた。「これら2つの同時に、しかも別々に得られた証言からして」とダーウィンは言う、「これは間違いのない話だ (it is certainly true) 」(同上)。だが証人がいずれも子供であること、しかも証言の1つはいわば又聞きにすぎないこと、また当時ビーグル号にはジェミー以外にも大人のフェゴ島民が2人乗り組んでいたのに、彼らに確認を求めた風もないことなどを考えると、これはおよそ科学者らしからぬ速断といわねばなるまい。フェゴ島民に対する極端な偏見からして、ダーウィンは確認の必要すら感じなかったのかもしれない。こうした食人情報に対する「信じやすさ」は、圧倒的な証拠を目の当たりにしながらも、執拗に現地人の確認を求めていったクックたちの態度とは、きわだった対照をなしている。

もっともクックたちにしても、こと食人に関する限り、ある程度先の入観(と、従って「信じやすさ」)を持っていたらしいことは、航海誌からもうかがえる。コロンブス以来3世紀(中世ヨーロッパにおいてユダヤ人に着せられた食人の汚名を含めると、それ以上)に及ぶ食人神話の累積を思えば、それはむしろ当然のことだった。当然ではなかったのは、彼らの食人とかかわりの広さと深刻さ、そしてその中で示された冷静で慎重な態度であった。クックの航海誌にみられる食人の記述は、ニュージーランドからハワイに至るポリネシアの全域と、北米大陸西岸を含む広範な地域にわたっている。ここではその中から、もっとも衝撃的なニュージーランドと、クック受難の地ハワイを選ぶことにしよう。

ニュージーランドにおけるカニバリズムとの出会いは、いずれも北島南岸、クックの命名にかかるクィーン・シャーロット海峡をのぞむ地域で起こっている。この出会いは航海誌では、次の4つの段階を追って記録される。

(1) 第1次航海の折、上陸して現地人の1団と出会い、そこに肉を調理して食べた跡と覚しき人骨を発見。通訳の問いに答え、彼らは戦闘の際の食人を認める(クック, 64)。

(2) 第2次航海の折、クック不在中に士官の1人が、殺されたばかりの人間の頭部を現地人から買い取って帰艦、そこから切り取った肉片を焼いてすすめた所、居合わせた現地人の1人がそれを食べる。やがて帰艦したクックがそのことを聞き、「多くの人が信じようとしないこの事実の目撃証人となることを願って」実験のくり返しを命じた所、それは再び成功する(同, 157)。

(3) 同じく第2次航海において、クックが指揮するレゾリューション号は、僚艦のアドヴェンチャー号とはぐれてしまう。その後喜望峰に立ち寄ったクックは、停泊中のオランダ船から、アドヴェンチャー号の乗組員がクィーン・シャーロット海峡で現地人に殺されたうえ食べられてしまったとの情報を得、さらに同地で同艦々長ファーノウが託した報告書を受け取る。だが事件の詳細をクックが知ったのは帰国後、事件当時の救助隊長バーニーがしたためた、なまなましい記録を手にした時だった。バーニーはその中で、ばらばらにされた遺体、現地人が常食するシダの根と一緒にかごに入れられた肉片などの状況証拠から、食人を断定している。(殺されたのは、食用の草を採取するために上陸した10名の乗組員であった。)(クック, 214-9)

(4) それから4年後、第3次航海の途次、現場を訪れたクックは、復讐をおそれて警戒する現地人から、事件の発端を聞きだそうとする。最終的には首謀者の来艦を認め、処刑せよという一部の要請をおさえて、その男から証言をひきだす。それによると、現地人の1人が交易のために持参した石斧を、イギリス人が受け取ったまま、返しもしなければ代替品をよこもしないので、現地人がイギリス人のパンを代価のつもりで取りあげたことから争いが起こったという。イギリス人が発射した2発の銃弾で2人の死者が出たのを見ると、現地人がいっせいに襲いかかって惨劇が始まったのだった(同, 242-4)。クックはこうした経過を、例によって主観をまじえず淡々と記述するのだが、それに続けて当地の風習——特に部族戦争の描写に移ると、珍しく感情的な表現をさ

しはさむ。例えば戦闘の目的について——「御馳走にありつきたいという動機も大いにあるに違いない」（同、245）。また勝利に続く食人について、「恐ろしい、残忍な、人倫にもとる」といった形容詞を連ねた上で、「まだ死にきらない敵を切り刻み、火にあぶって肉を貪り食らう。何のためらいもなく、これ以上うまい物はないといわぬばかりに」（同上）。これではまるで目撃談だが、クックはその情報源を明らかにしていない。

このようにみえてくると、さすがのクックもカニバリズムに関する限り、事実重視の客観主義をつらぬけなかったように思える。これだけ圧倒的な証拠（と実は言い切れない面もあるのだが）をつきつけられ、かつ深刻なかかわりを持たされては、それもやむをえなかったと言うべきかもしれない。むしろ犠牲になったイギリス人に不利な証言を加害者からひきだし、しかも報復的な措置を一切とろうとしなかった所にクックらしさをみるべきだろう。だが一方クックたちが持ち帰った豊富で具体的な食人情報が、19世紀のイギリス海洋小説を通じて、「南海の楽園と食人種」というパラダイムの形成を助けたこともまた事実なのである（例えばバランタインの『さんご島』）。

それだけにクックがハワイ島で不慮の死をとげた時、かわってレゾリューション号の指揮をとったキング艦長の事後処理と記録の冷静さは、特筆に価しよう。この不幸な事件が、ポリネシアを訪れるヨーロッパ人航海者をしばしば悩ませた盗難に端を発することはよく知られている。僚艦ディスカヴァリー号のカッターが島民に盗まれた時、クックは直ちに島の「王」を人質に取ろうとする。それが盗品が返されるまでの、クックの常とう手段だったのである。ところが今度ばかりは、島民が結束して人質の連行を阻止しようとし、強行をはかるイギリス人との間に衝突が起こる。クックはそれまで、なぜか聖性をそなえた存在として、島民の尊崇を受けていた。従って島の男たちが武装してイギリス人を取りかこんでも、クックの身に直接の危害が及ぶおそれはなかった。ところが海兵隊の発砲が、事態を急変させる。その発砲で首長の1人が殺されたことを知った島民が、ついにクックに向かって投石をはじめようとしたのである（ク

ック、406)。クックはそれを思い止まらせるため、また槍で襲われた部下を救うため2度発砲し、1人を殺す。それでもまだクックを正面から襲おうとする者はなかったが、彼がボートの海兵隊に発砲をやめさせようと群衆に背を向けた途端、後から槍で刺されて波打ち際に倒れる。クックの姿は、折り重なって襲いかかる島民の山の中に、たちまち見えなくなってしまった（同、407）。

問題はその後にあった。残されたクック隊の士官たちは、直ちに遺体の収容にとりかからなくてはならなかった。作業は困難をきわめた。なぜならクックの遺骸は解体され、気が遠くなるほど多数の細片に分割されてしまったからである。聖性をおびたクックの肉体の各部分は、それぞれその位置にふさわしい呪力を持っており、その重要度に応じて大小の首長や神官たちに分配されたい（同、416）。要求に応じてその日のうちに引き渡されたのは、重さ9ないし10ポンドの肉塊のみであった（同、412）。回収可能な全ての部分を返還させるのに、イギリス側は実に5日を要している。その間島民からの挑発行為もあり、英艦はついに威嚇のため艦砲射撃を行わなければならなかった。砲撃は指揮官の意図をこえて報復の色彩をおびはじめ、海辺の村落を全焼させたほか、逃げまどう島民を射殺し、2人の首を持ち帰るということまでであった。こうしてクック死後4日目から5日目にかけて、イギリス側はようやく遺体の完全収容に成功する。この間の死者はイギリス人5名に対して、ハワイ島民25名のほか、砲撃による死者数しれず。艦上には一晩中、岸辺の慟哭が聞こえてきたという（同、416）。翌日甲板に並べられたクックの遺体の各部分を、解剖学的な細密さで描くキング艦長の冷厳な筆致には、観察と記録にかける航海者のすさまじいまでの執念が感じられる（同、417）。

さてクックの遺骸が解体され、肉を取り除かれていることから、イギリス人たちは当然食人の疑いを抱き、島民にその点を質している（同、412）。それに対して相手は、「途端に激しい嫌悪の情を——ヨーロッパ人なら誰でもするように——面に表して、あなた方の所にはそんな習慣があるのかと逆にたずねてきたが、そこには何の作為も感じられなかった」という。島民はまた、「オロノ」（クックの現地名）はいつ戻ってくるのか、戻ってきたら自分たちはどう

なるのだろうと心配していたともいう。キングはこうした反応をただ記録するのみで、感想や反論はいっさい付していない。また一方では威嚇や報復の行き過ぎを深く反省し(同、414、416)、島民との関係の修復に成功してもいる(同、418)。キングはハワイ(「サンドウィッチ」)諸島を去るにあたって、航海誌に4ページをこえる民俗誌をつけ加えているが、その中でキングは、島民の「突然の怒り」がクックの死という、とりかえしのつかない悲劇を生みはしたものの、「彼らの日常の行動を公平に観察すれば、いたって柔和で人なつこい性格であることを認めぬわけにはいくまい」(同、435)と述べ、この地の気風に高い評価を与えている。

これに較べるとクックの祖述者たちが、航海誌の含む食人情報に時折示す過剰な反応には、クックたちとは無縁の、商業主義的な扇情趣味が見えかくれしている。彼らの手にかかると、例えば「食人実験」は「実験」ではなく、「敵を襲った一隊が敵の死体を1つかついで凱旋してくると、早速それを料理し始め、愕然と見守るレゾリューション号乗員たちの眼前で、さもうまそうに食いだした」ことになり、⁶⁾シャーロット海峡での犠牲者の数は10名から16名にふくれあがり、⁷⁾そしてクックは「明らかに肉まで食われた」⁸⁾ ことになってしまう。食人という人類最大のタブーには、常に人をこうした誇張にさそう力があるらしい。それを可能な限り抑制したところに、クックたちの偉大さがあった。

5. 文明・進歩・進化——「気高き蛮人」の行方

『ガリヴァー旅行記』といえばいうまでもなく、『ロビンソン・クルーソー』の成功に刺激され、かつは航海記ブームをあてこんで書かれた架空の旅行記だが、架空のその世界の中に現実の土地と人が2度だけ(むろんイギリスは別にして)、フィクションのカーテンを押し開くようにして顔をのぞかせる。日本とオーストラリアである。そのうちオーストラリアにガリヴァーが漂着するのは第4次航海の折、4年をすごしたフイヌムの国を後に、あてもなくボートをこぎだした時のことだった。たどり着いた所が当時「ニュー・ホランド」と呼ばれたオーストラリアの、南西部なのか南東部なのか、『旅行記』の記述には

混乱がみられるが、⁹⁾それはともかく上陸後4日目にガリヴァーは素裸の現地人に襲われ、彼らが放った矢で左のひざに深手を負う。ガリヴァーはほうほうの体で襲撃を逃れながらも、実はこの地を去りがたい気持ちでいる。なぜならフィヌムの国で、人間の醜悪さのエッセンスともいべきヤフー——馬に奴隷として仕える、退化した人類ヤフーのおぞましさを見せつけられたガリヴァーには、そのヤフーの支配する祖国に戻ることに耐えがたく思われたのである。波間をボートで漂ううち沖合いに船影を見かけた時も、むしろ発見をおそれ、「ヨーロッパのヤフーどもと一緒に暮らすぐらいなら、この蛮人たちに運命を託した方がまし」¹⁰⁾ だと考えて、懸命に元きた方向にこぎ戻る。ガリヴァーは（そしてスウィフトは）、素裸のオーストラリア人もまた、ヤフーの一変種にすぎないかもしれないことに気付かぬ風なのである。

彼らがこの明白な矛盾に気付かなかったのは、ヨーロッパ思想史上「原始礼賛 (primitivism)」とよばれる特有のパラダイムによって呪縛されていたためにちがいない。「原始礼賛」は文明批評の一形態として、具体的には「野人 (the wild man)」——すなわち自然人崇拜となって中世末期に確立する。¹¹⁾それを大きく飛躍させたのが、コロンブスによる新世界の発見であった。新大陸のインディオたちは、人身供犠や食人の汚名を着せられ次々に奴隷化されていく一方、思想界の少なくとも一部では、楽園追放以前の無垢な自然人——いわゆる「気高き蛮人 (the Noble Savage)」として、熱っぽい視線を浴びることになったのである。モンテーニュによって代表されるこの動きは、航海者たちの報告から常に新たな刺激を受け取りながら、18世紀のルソーまでつながっていくが、18世紀も後半になって、ブーゲンヴィルやクックの航海が、南太平洋という地図上の広大な空白を埋めていき、その島々と人々について豊富な情報をもたらしはじめると、原始礼賛の思想潮流は、新大陸発見以来の活況を呈することになる。ヨーロッパの知識人は南海の島々——とりわけタヒチ島に、地上の楽園と気高き蛮人を見出したのである。その時ルソーはすでに、『人間不平等起源論』と『エミール』を書きあげていたが、ディドロは『ブーゲンヴィル航海補遺』(1772)を書いて、楽園の破壊をもたらすヨーロッパ諸勢力の進出を厳しく非

難している。クック自身は例によってタヒチ島の民俗誌を（島民の抑え難い盗癖をも含め）、一切の感傷や偏見ぬきに綴っているが（クック、37-42ほか）、ルソーの同時代人として（ルソーが読んだフランスの航海誌をクックもまた利用している）、¹²⁾例えばフエゴ島民に関する記述にそえて、クックとしては珍しくさしはさんだ感想（「これを見ても洗練だのぜいたくだのということが、人間の幸福といかにかかわりの薄いものかが分かる」——クック、18）の中に、プリミティヴィズムへのそこはかとない共感を読みとることができるかもしれない。

だが航海者たちがもたらす情報を利用して新しい人間観の構築にとりこんでいたのは、原始礼賛主義者ばかりではなかった。18世紀の後半はまた、人種分類学の成長期でもあった。例えば分類学の祖リンネは、人類を「野生・アメリカ・ヨーロッパ・アジア・アフリカ・奇形」の6種に分類しているが、航海者の東南アジアからの報告にもとづいて白子を類人猿の中に含めてしまった。¹³⁾リンネは人類の最低条件として、理性・判断力・分節言語の3つを考えていたという。¹⁴⁾人種分類学はその後ブルーメンバッハに始まる人骨計測へと展開していき、脳容積を示す頭骨の計測が大流行するが、そうした中でイギリス人のホワイトは、上腕の計測値からフエゴ島民がチンパンジーにもっとも近く、ヨーロッパ人がもっとも遠いことを「立証」している。¹⁵⁾分類学者たちは「気高き蛮人」をエデンの園の彼方ではなく、進化論的序列のしかるべき段階に位置づけようとしていたのである。フエゴ島民とチンパンジー。そして人類の最低資格としての分節言語。我々はどうやらダーウィンに近付いてきたようだ。なぜなら第2節でみたように、ダーウィンは分節言語とは到底思えない不快な音を発するフエゴ島民を、オラン・ウータンになぞらえていたからである。

だが実はその前に、「気高き蛮人」をめぐるヨーロッパ思想界の転換を確認しておかなくてはならない。それは「文明」概念の導入による「蛮人」の格下げである。転換が劇的に起こったのは19世紀ヴィクトリア時代のイギリスであって、そこでは「進歩」と「文明」への信仰が、自然に対する人為の優越を確立する。「自然のし残した仕事を、人が仕上げる」と誇らかに歌い上げたのは、

マシュー・アーノルドであった。¹⁶⁾この新しいパラダイムの中では、「蛮人」すなわち自然人は、人為を加えて文明化すべき存在——後にキップリングが名付けた「白人の重荷 (the White Man's burden)」となりはてる。すでに世紀初頭にコールリッジは、もしパンの木があるために南海の人々が働かないのだとすれば、彼らに勤労の美德を教えるためパンの木を根こそぎにすべきだと友人に語ったという。¹⁷⁾かくて「気高き蛮人」はその気高さを失い、反文明的なリビドーの体现者として社会の埒外に放逐され、例えばフランケンシュタインの怪物となって、辛うじて生きのびるのである。¹⁸⁾

このような思想史的文脈の中に置いてみると、クックとダーウィンの違いが、出自や個人的資質の違いにとどまるものではないことが想像できる。出自といえばダーウィンが、母方の家系に奴隷反対運動の雄ウェッジウッドを持っていたことはよく知られている。ダーウィンもまた『航海』の中で、ブラジルの黒人奴隷やタスマニア島先住民の惨状に対して、同情と義憤を惜しまない（ダーウィン、430, 480）。だがこうした人道主義的な正義感は、ダーウィンに異文化をみつめる曇りのない目を与えはしなかった。理由は要するに、彼が時代から受け取ったパラダイムの性格にある。本来進化論的なそのパラダイムを、進化論の完成者ダーウィンが受け入れたとしても、何の不思議もあるまい。¹⁹⁾

ダーウィンは「最下等の蛮人」を観察する興味は、トラやライオンをその野生状態に置いて観察する興味に等しいと考えていた（ダーウィン、485）。彼はまたフェゴ島の社会が、貧富の差を知らぬ完全な平等社会であることにふれて、それを社会生活を営む動物の場合と比較しつつ、その平等が克服され富の集中が実現しない限り、「文明の進歩は早まらない」だろうと言う（同、219）。さらにダーウィンは、オーストラリアにおける先住民人口の激減という問題に適者生存の発想を適用して、「動物の異種間に働くのと同じ力が、異人種間にも働くようだ——すなわち優者が常に劣者を絶滅に追いやる」（同、418-9）と言い、「白人はどうやらこの地を受けつぐべく運命づけられているらしい」（同、424）と述べる。「この地」つまりオーストラリアのシドニーの街を歩きながら、ダーウィンの胸は「イギリス人に生まれてよかった」（同、415）という思いに

ふくらんでいた。後にダーウィンは「ビーグル号の航海」をかえりみて、「南海にキリスト教が導入された結果生じた急速な進歩」にふれ、「この変化をもたらしたもののこそ、イギリス国民の人類愛に外ならない」ことを確認しつつ、60年前にその変化を見通せなかったクックの不明に驚くのである（同、486）。

こうして2つの名高い航海は、2つの異なった異文化像を我々の手元に残すことになった。これら2つのイメージの違いは、歴史の流れの前にヨーロッパ中心主義が大きく後退しつつある今日、新たな問題を提起しているように思われる。

（注）

- 1) フラン・ムーアヘッド（村上啓夫 訳）『運命の衝撃—南太平洋、未開と文明の邂逅』（早川書房、1967）
アリストテア・マクリーン（越智道雄 訳）『キャプテン・クックの航海』（早川書房、1982）
フラン・ムーアヘッド（浦本昌紀 訳）『ダーウィンとビーグル号』（早川書房、1982）
石川栄吉『南太平洋物語—キャプテン・クックは何を見たか』（力富書房、1984）
- 2) 私が用いたテキストは次のとおり。
John Barrow (ed.), *Captain Cook's Voyages of Discovery*, Dent, 1967. (以下「クック」と略す。)
Charles Darwin, *The Voyage of the Beagle*, Dent, 1972. (以下「ダーウィン」と略す。)
- 3) ムーアヘッド『運命の衝撃』第1部第5章
- 4) 同 122ページ
- 5) W. アレンズ（折島正司 訳）『人喰いの神話』（岩波書店、1982）
山崎カヲル「カニバリズムと他者の問題」『思想』1983年5月号
- 6) マクリーン『キャプテン・クックの航海』176ページ
- 7) ムーアヘッド 前掲書112ページ
- 8) マクリーン 前掲書「訳者あとがき」264ページ
- 9) Jonathan Swift, *Gulliver's Travels*, Dent, 1962, p. 304.
- 10) *Ibid.*, p. 305.
- 11) Edward Dudley and Maximillian E. Novak (eds.), *The Wild Man Within: An Image in Western Thought from the Renaissance to Romanticism*, Pittsburgh UP, 1972, p. 27.

- 12) *Ibid.*, p. 232.
- 13) *Ibid.*, pp. 267–8.
- 14) *Ibid.*, p. 268.
- 15) *Ibid.*, p. 271.
- 16) *Ibid.*, p. 285.
- 17) *Ibid.*, p. 288.
- 18) *Ibid.*, p. 304.
- 19) だが、自然淘汰説発表の栄誉をダーウィンと分かちあったウォーレスは、このパラダイムを受け入れていない。彼の『マレー諸島 (*The Malay Archipelago*) 』(1869) は、現地文化への高い評価にもとづくヨーロッパ批判を少なからず含んでいる(rpt. Dover, 1962, pp. 455–8)。

